

弘大医学部附属病院

初夏の院内コンサート

演奏 弘前大学医学部管弦楽団

指揮：馬場正之（青森県立中央病院）

演奏者の紹介

弘前大学医学部管弦楽団

当楽団は弘大医学部創立50周年の1994年に結成された室内オーケストラです。その記念式典で医学部職員と学生によるバッハ管弦楽組曲の祝賀演奏(フルート独奏：馬場正之)が関係者に大きな感動を与えたことから、歴代医学部長と関係者のご尽力で学生と教職員による当楽団が正式に立ち上げられ、当時の耳鼻科教授で弘前交響楽団のコンサートマスターであった新川秀一氏をリコーダーとし、教養部で古典音楽楽理を講じていた馬場神経内科助教授を常任指揮者として活動を開始しました。あれから20数年、新川教授が退職して弘前を去られ、馬場が県立中央病院に移動した後も当管弦楽団は活発な活動を続け、今日まで沢山の医学部学生が合奏や音楽づくりの楽しみを身につけて築きました。主たる演奏の場は弘大病院や県病での四季折々の院内コンサート、弘大祭コンサート、解剖体慰霊祭および医学部関連学会の懇親会ミニコンサートなど。ほとんどの学生は医学部入学後に初めて楽器を手にした初心者ですが、大勢のなかの一人ではなく、一人ひとりが積極的に合奏に加わる室内楽的な響きを目指して練習を積み重ねています。一昨年6月にこの講演のため来弘されたドイツ・フランクフルト大学の心臓外科医マーチン・ストーク教授はヴィオラの名手。講演後に当楽団の練習に参加して、学生たちの充実した合奏に大変感激された結果、昨年再度来弘されてミニコンサートでの共演が実現し、我々もストーク先生も大感激したという出来事もありました。

これまで取り上げた主な曲は、ブランドンブルク協奏曲、管弦楽組曲、チェンバロ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲、フーガの技法などのバッハ作品多数、ヘンデル、ヴィヴァルディ、コレリ、テレマン、パーセル、バッハヘル、ラモーなどのバロック管弦楽曲やコンチェルトのほか、最近ではモーツァルトやハイドンの初期～中期の管弦楽曲に力を入れています。なお、モーツァルトやハイドンのオーケストラ曲演奏においても、1790年代までチェンバロ(ハープソコード)が加わっていたという史実から、チェンバロを加えた演奏を標準としています。

馬場正之(指揮者)

1973年弘大医学部卒。学生時代から吉田雅夫氏や多田逸郎氏にフルートとリコーダーの手ほどきを受け、堀米蔵氏に古典音楽調律法を師事。F.コンラート、F.ブリュッヘン、J.P.ランバル、A.ニコレ各氏などのマスタークラスを受講。79年～83年英国政府医学研究員としてロンドン大学神経病研究所に勤務、同時にロンドン市立ギルドホール荻大N.ハッデン、P.ピケット各氏にバロックリコーダーを、J.ソラム氏にバロックフルート奏法を、W.バークマン、J.ホロウエイ各氏に古典室内楽を師事。83年帰国後は弘大医学部で神経内科講義を担当すると同時に、弘大教養部で今井氏子音楽科教授と共に古典音楽演奏論を担当。また、85年より島口和子氏主宰の弘前バッハアンサンブルにフルート兼リコーダー奏者として参加し、東京、パリ、フランクフルト、ライブチヒ、ウーレン、ザルツブルク、ローマ、ニューヨークなど国内外のコンサートでソロ・フルートを担当。"樺の深いフルート"(音楽の友2013)と評される。95年から弘大医学部管弦楽団を率いて医学部関連の各種式典や学会懇親会、大病院や弘大祭のコンサートを指揮。本職では文科省神経難病研究班員、弘大病院神経内科診療科長、県立中央病院神経内科部長、臨床神経生理学会名譽会員、糖尿病合併症学会名譽会員、英国王立医学会終身フェローなどを歴任。現在も県病医療顧問として診療や学会活動で多忙の身だが、毎週水曜日の練習日には医学部コミュニケーションセンターに欠かさず駆けつけ、学生達と音楽づくりの楽しみを分かち合っている。

(FRI)
2019 6/14
PM 6:45~
外来待合ホール

プログラム

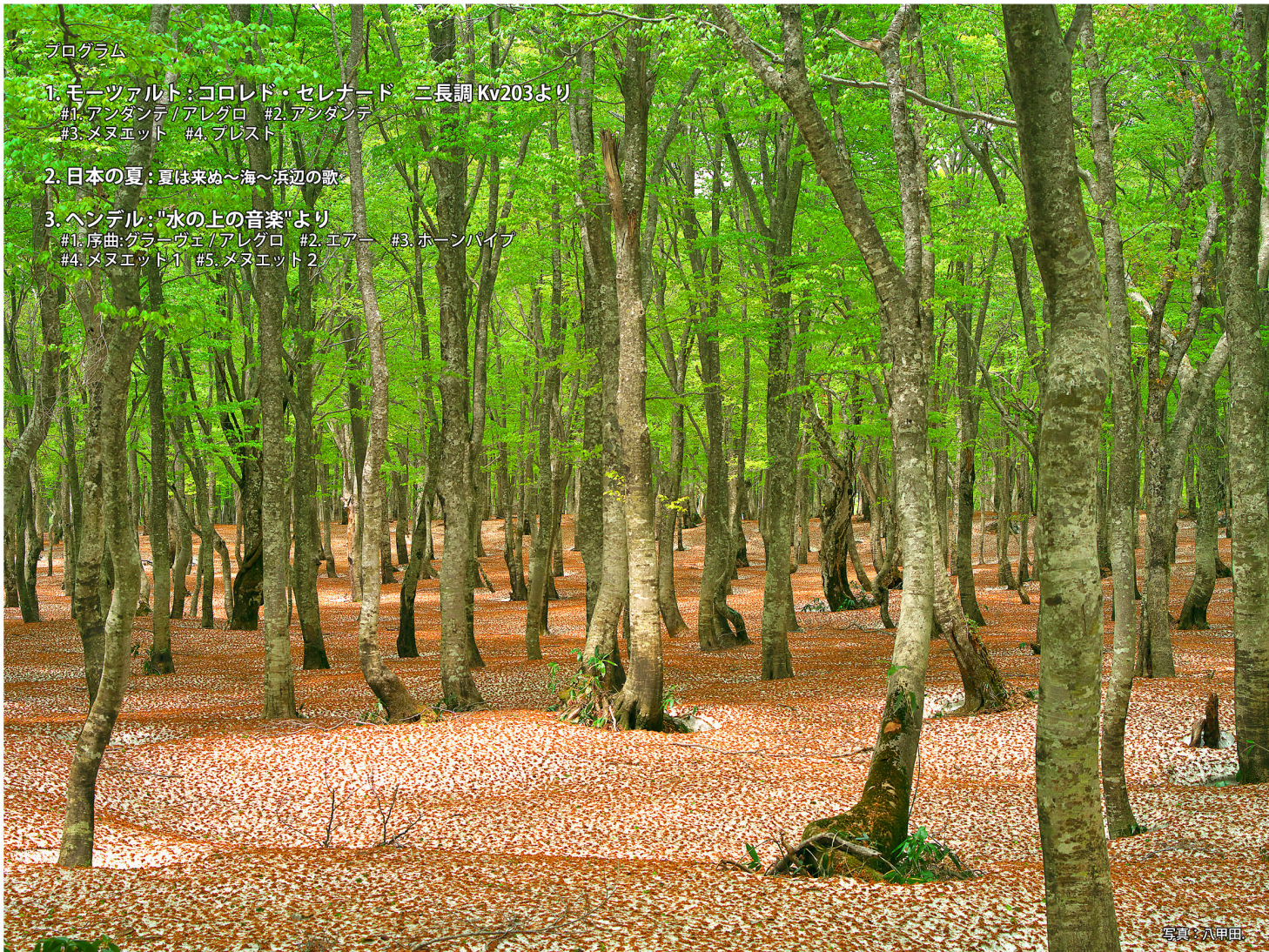
1. モーツァルト：コロレド・セレナード 二長調 Kv203より

#1. アンダンテ / アレグロ #2. アシダンテ
#3. メヌエット #4. プレスト

2. 日本の夏：夏は来ぬ～海～浜辺の歌

3. ヘンデル："水の上の音楽"より

#1. 序曲：グラーヴェ / アレグロ #2. エアー #3. ホーンパイプ
#4. メヌエット1 #5. メヌエット2



写真：八甲田

主催：弘前大学医学部附属病院

協賛：一般財団法人 弘仁会